

保育における まなざしの在り方

榎 沢 良 彦

はじめに

私たちは他者とかかわり合うときには、必ず相手のまなざしを感じますし、逆にこちらも相手にまなざしを投げかけています。その意味で、他者とのかわりは「まなざしによるかわり」であると言えます。そこで、本稿では、他者とのかわりにおけるまなざしの在り方について、もう少し掘り下げて考えてみたいと思います。

一、存在を供与し合うまなざし

四歳児のY子は新入園児です。Y子は入園当初、母親と離れることができず、母親が帰ってしまった後は、担任にまわりついていました。Y子は担任の他にも、M先生を非常に頼りにしており、よくM先生と遊んでいました。ようやく、Y子が元気にすこす姿が目立つようになってきた七月、次のような出来事がありました。

事例一 Y子が私と視線を合わせて微笑む

(一九九六年七月十二日)

私が幼稚園に着いたとき、丁度、Y子はM先生と玄関にいた。どうやら、Y子はたった今母親と別れたところのようだ。Y子は堅い表情で、M先生にくつついて、小声で話しかけている。M先生は、作業をしながらも、はっきりした口調でY子に叱じてやっている。Y子はM先生の服を片手でしっかり握っている。私はすぐ近くで、黙ったまま、笑顔でY子を見つめる。ひたすらM先生に話しかけていたY子が、私の視線に気づき、私の方に振り向くや、にこっと微笑む。そして、再びM先生の方に視線を向ける。私はずっと見続けているので、Y子はたびたび私の方に振り向いては、にこっと微笑む。M先生は「目と目で気持ちを通じ合っているみたい」と、笑顔で言う。

この日、Y子は母親と別れたばかりで、心細さを

感じていたと思われまふ。それゆえ、いつもY子の相手をしてくれるM先生にしきりに話しかけ、すがろうとしていたのです。M先生はそのことがよくわかっているので、仕事をしながらも、Y子に叱じてやっています。Y子が心細い気持ちになっているという事は、「Y子の存在が揺らいでいること」を意味します。だからこそ、Y子は必死にM先生にすがり、自分の存在を保持しようとしていたのです。

ところで、この日までに、Y子と私は何度も一緒に遊んだことがありました。したがって、Y子にとって私は「親しい存在」であると言えます。にもかかわらず、私が微笑みながらY子を見つめる以前には、Y子にとって、私は全く「関心外の存在」でした。確かに、私の姿がY子の視野に入っていたのですが、私はほとんどどうでもよい存在だったのです。つまり、私は「存在していない」も同然でした。このとき、Y子にとって頼るべき相手として、

確かに存在していたのは、いつも親しんでいるM先生でした。そのM先生にくっついていられるにもかかわらず、表情が堅いままだったのは、M先生が仕事をしながらY子に伝えていたからだと思われます。つまり、M先生のまなざしがY子のまなざしとしっかり出会っていなかったからです。

さて、私は、Y子にとって存在していないようなものでした。ところが、私がある場にとどまり、Y子を見つめ始めたことで、Y子は私の存在を無視できなくなりました。Y子は自分に注がれている私のまなざしに気づくや、私の方に振り向いて、にこっと微笑みました。このとき、Y子にとって、私は「親しい存在」として立ち現われたのです。

それまで、Y子はひたすらM先生にすがりつこうとしていました。そのとき、Y子は周囲に関心を向ける余裕などありませんでした。Y子は自分の存在を支えてもらうことに懸命であり、他者と遊びの関

係を結ぶことはできませんでした。ところが、私のまなざしを意識したとたん、Y子に余裕が生まれました。笑顔は、Y子が「緊張した余裕のない在り方」から、「周囲と柔軟な関係を結べる余裕のある在り方」になったことを意味します。

Y子にそのような変化をもたらしたのは、「私が他の事をしながら応じる」というかわり方ではなく、「私がある場にとどまり、笑顔で見つめる」というかわり方をしたことにあります。前者のような場合には、保育者のまなざしは「移ろいゆくまなざし」となり、子どもと保育者が会おうということは起きにくくなります。つまり、子どもには、保育者の意識が全面的に自分に注がれているとは感じられません。一方、後者のような場合、保育者のまなざしは「とどまり続けるまなざし」ですから、子どもは、自分に向けられる保育者の意識を全面的に感じられます。

子どもが、保育者の意識を全面的に感じられるということは、「保育者が腰をすえて、自分の許にしようとしている」と感じられるということです。このとき、子どもは保育者の存在を「移ろいゆくもの」ではなく、「確実な手こたえをもって、厳然として存在するもの」と感じることができます。同様に、保育者も、子どものまなざしが自分に注がれていると感じられるとき、その子どもの存在を厳然たるものとして意識しています。こうして、子どもと保育者がまなざしを交わし合うとき、相互に「相手の存在の厳然性」を発見することになるのです。

ところで、Y子は私とまなざしを交わし合ったとき、微笑みました。それは、「他者により見られる自分の存在を意識したこと、見られている喜び」を感じたことを意味します。すなわち、Y子は、「自分が厳然としてここに存在していること」を、私のまなざしの中に感じたのです。

まなざしは、いつでも相手をいきいきさせるとは限りません。相手のあらゆる可能性を奪い取り、石のように硬化化させてしまうまなざしもあります。それは「(存在を)略奪するまなざし」と呼べるでしょう。逆に、相手にあらゆる可能性を与え、生きる喜びを感じさせるまなざし、それは「(存在を)供与するまなざし」と呼べるでしょう。一般に、前者は「冷い」と形容され、後者は「温い」と形容されます。保育者のまなざしは、基本的に「供与する



まなざし」です。私の微笑みのまなざしは、Y子に「あらゆる可能性を有した厳然たる存在」として、自分自身を感じさせたのです。そして、私もまた、Y子の微笑みのまなざしに出会ったとき、同じように感じていたのです。

このように、保育の中で、子どもと保育者は「供与するまなざし」を向け合うことがあります。そのとき、両者は相手の存在と共に、自分自身の存在を発見しているのです。

二、たわむれ合うまなざし

私たちが「厳然たる他者の存在」を意識するとき、同時に「他者により見られている自分の存在」を意識しますから、自己と他者の間に隔たりが存在します。早坂泰次郎は、西欧人にとって「出会い」には、「我」と「汝」の区別に基づいた「緊張―対立」の意識が存在するのに対し、日本では、「我」

と「汝」の区別があいまいなため、「出会い」においては、「親和―充足」が存在する、と言います。^{*1}

子どもと保育者が出会うときには、西欧におけるような、「緊張―対立関係」は存在していません。むしろ、確かに隔たりはあるのですが、同時に、「親密感」も存在します。それゆえ、子どもと保育者は、出会ったとたんに、他の区別があいまいになる程、急速に近づいてしまうのです。それは、子どもと保育者が「遊びの関係」に入ることの意味します。それを次の例に見てみましょう。

事例二 新人園のM夫が私に手荒にかかわってくる

(一九九四年四月二十二日)

きょう、初めてこのクラスに入る。私がここにしながら入って行くと、子どもたちが私の周りに集まって来て、話しかけてくる。男児たちは叩いたり、けとばしたりと、手荒なかかわり方をしてく

る。そんな中、M夫は一言もしゃべらず、笑顔で、紙筒で私を突っついてくる。そして、私の顔をしっかりと見る。私は他の子どもたちに応えながら、M夫をくすぐったりしてやる。

おやつの時間、子どもたちは丸く並べた椅子にすわり、おしゃべりをしている。M夫は黙って椅子の前に立ったまま、なかなかすわらない。ようやくすわる。私が彼の背後に行き、黙ってすわって見ていると、やがてM夫は笑顔で私の方に頻繁に振り向く。私も笑みを送ってやる。すると、M夫はここにこしながら、私の足をけり始める。私はそれを笑顔で受けとめ、彼の足をくすぐってやる。

M夫は四歳児ですが、この頃は、まだ緊張しています。他の子どもたちと遊ぶことができないでいました。それだけに、笑顔で現われた私に、M夫はかわりを求めてきたのでしょ。

M夫は笑顔で私を見ながら、手荒な働きかけをしてきました。この行動は、勿論、私をいじめようなどという悪意に満ちたものではありません。それは、「遊ぼう」という、「遊びへの呼びかけ」です。

それを、M夫の笑みをたたえたまなざしが端的に語っています。それゆえ、私も笑顔でM夫に応えたのです。M夫にとっても、私の笑みをたたえたまなざしは同様の意味をもったでしょう。おやつの間にも、M夫と私がまなざしを向け合ううちに、M夫が私に手荒な働きかけをしてきました。これも私には「遊びへの呼びかけ」と感じられました。そして、私はその呼びかけに素直に応じました。

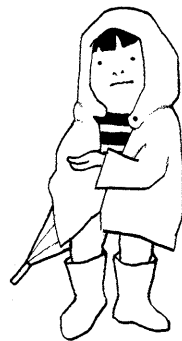
このように、M夫と私は初対面であるにもかかわらず、まなざしを向け合うことで、容易に「遊びの関係」になってしまいました。西村清和は、「遊戯関係」というのは、「ものとわたしとのあいだで、いずれが主体とも客体ともわかちがたく、つかずは

なれずゆきつもどりつする遊動のパス的關係である^{*2}と言います。つまり、遊び相手同士は、主客の融合したような状態にあるのですが、両者は完全に一体化しているわけでもないのです。両者の間には、「つかずはなれず」という、いくらかの「余地」「隔たり」が存在しているのです。

遊ぶということとは「たわむれること」ですから、遊びの關係にある者のまなざしは、「たわむれ合うまなざし」ということになります。そして、このまなざしは、自己と他者が別個な存在として、対峙し合うような隔たりを生むのではなく、むしろ、その隔たりを縮小し、「つかずはなれず」という微妙な隔たりを生むのです。

三、引き合うまなざし

遊びの關係にある者同士は、親密感を抱きながら、いくらかの隔たり(遊びの余地)を保っている



のですが、この關係は、容易に隔たりの無い状態を生み出す可能性をもっています。例えば、次の例を見ましょう。

事例三 M夫が私に負ぶさり、友だちにかかわる

(一九九四年五月二十一日)

廊下で年少組の子どもたちと遊んでいると、年中組の方から、M夫が、上目づかいだが、笑顔で私に向かって歩いてきた。少しはにかんでいる様子のM

夫に、私はしゃがんだまま、しっかりと視線を向け、笑顔で「おはよう」と声をかける。M夫は黙って私に負ぶさり、私の首に両腕をしっかりと回す。

私はM夫を負ぶって、他の子どもたちとぶざける。M夫も私の背から友だちをからかったりし始める。M夫を床に降ろすと、M夫は背後から走ってきて私にとびつくことを始める。そして、いかにも楽しそうな表情をしている。私が背中に手を回し、「これは何だ」とおどけた調子で言って、くすぐったりすると、M夫は笑い声を上げて喜ぶ。実に快活でいきいきしている。

このころまでに、M夫と私は親しくなっていました。この日、離れた所から私にしっかりと視線を向け、まっすぐ歩いてくるM夫に、私は私への親密感を感じました。私はM夫のまなざしに引きつけられ、自ずと、好意的な思いを込めて、M夫にしか

りまなざしを向けました。この二人のまなざしには、互いに相手を受け入れ合う合意が含まれていません。それゆえ、M夫は何のちゅうちょもなく私に負ぶさり、密着してきたのですし、私もそれを当然のこととして受け入れたのです。このときのM夫と私は遊んではいません。二人はまさに一体化しており、それゆえに、遊ぶための隔たりがないのです。

ここで、「隔たりが無い」というのは、単に物理的な距離が無いということではありません。ここでM夫は、身体的な一体化（物理的距離無し）を求めると共に、自己と他者の一体化（自他の区別の無さ）を求めているのです。M夫と私はまなざしを向け合うことにより、物理的隔たりはもとより、自他の隔たりをも無くしていったのです。その意味で、ここで交わされたまなざしは、「引き合うまなざし」と呼べるでしょう。

ところで、この一体化は決して強固なものではあ

りません。それは容易にゆるみます。ほどなくM夫は友だちとふざけ始めましたし、さらに、私に負ぶさっていながら、私ともふざけ合いを始めました。

「ふざけること(遊び)」は、すでに述べたように、自他の間にいくらかの隔たりを保つことです。したがって、一体化したM夫と私との間に、いくらかの隔たり(つかずはなれずの隔たり)が生じたこととなります。それは同時に、両者のまなざしが、「引き合うまなざし」から「たわむれ合うまなざし」に変容したこともあります。

この変容は、特別な決意もなく、自然に、しかも容易に生じます。この二種類のまなざしが、一方から他方へと、自然に変容しうるのは、この二種類のまなざしに、「親密感」が共通の契機として含まれているからです。

以上、保育のなかに存在しているまなざしの在り

方を考えてきました。この考察を通して明らかに
なったことは、まなざしの在り方と当事者の関係
(かかわりの質)は表裏一体であることです。まな
ざしの在り方は関係により左右される半面、まなざ
しの在り方が関係を形成してもいるのです。

(富山大学)

注

*1 早坂泰次郎『人間関係学序説』川島書店、一九九

一年、一二八―一三三頁

*2 西村清和『遊びの現象学』勁草書房、一九八九
年、三一―三三頁